

原始の時代区分と縄文文化

阿子島 香

[東北歴史博物館館長講座概要：歴史博物館グローバル紀行

Part2: モノが語る人類誌]②

2025 年 5 月 24 日

講座要旨

今年度の館長講座は、昨年度に引き続くシリーズでお話します。「歴史博物館グローバル紀行 part 2: モノが語る人類誌」と題しまして、世界各国の博物館を、皆さんと一緒に巡ることにします。考古学と歴史を中心に、海外のミュージアムを訪ねて、世界史の流れを東北地方と関連させて考えていきます。全8回の連続講座ですが、各回は独立した内容ですので、お楽しみください。今後の内容は、次のように予定しております。②原始の時代区分と縄文文化、③古代ローマ：ポンペイとガリア、④中世フランスの美と遺産、⑤近代アメリカの光と影：西部開拓史、⑥世界民族誌と東北旧石器人の文化適応、⑦世界民族誌と東北縄文社会の復元、⑧東北の基層文化論：縄文とエミシ、の順でお話します。これまでに私が調査研究を行ってきた地域の博物館を主にして、人類の歴史すなわち世界史の、さまざまな面に触れていきます。またお話の内容では、時々、旧シリーズ「東北グローバル考古学」の、全24回の内容と関連させつつ、参照していきたいと思います。旧シリーズは、引き続き東北歴史博物館のHPにて、講座概要を公開しております（多くは「読む館長講座」として、改めてエッセイとして再構成したものになっています）。あわせてご参考としていただければ幸いに存じます。

世界史の流れという漠然と感じられるかもしれません。もっと具体的には、通年のテーマとしまして「時代区分」ということの意味を考えていきたいと思います。教科書などでは、当たり前のように「原始」「古代」「中世」「近世」「近代」「現代」となっていますが、いったい何がどう変わったのでしょうか。考古学、社会史、経済史、美術史、人物史、また現在の民族誌などの切り口で、それぞれの時代の特徴を探っていきましょう。みなさんと一緒に、「学び直しの世界の旅」に出たいと思っています。

今回は、長い総称としての時代区分「原始」の中でも終わりに近い「縄文時代」を取り上げます。日本では、「弥生時代」を経て、次の時代区分「古代」に移行します。（古墳時代については、「古代国家」成立をめぐる、原始か古代か両説あります。）。縄文文化は、世界的にもユニークな性格と、新石器時代という地球的な性格との、両面を持っています。2021年にユネスコ世界文化遺産に登録された「北海道・北東北の縄文遺跡群」は、17の構成資

産から成り、狩猟採集社会を基本としながら、長期的な定住生活を確立し、土偶など高度な精神文化を発展させたという主旨の OUV（顕著な普遍的価値）で評価されました。なお、教科書や概説でもおなじみの「原始時代」という時代区分は、必ずしも世界共通ではなく、「先史時代」（Prehistoric Age）が時代区分として、より一般的です。

縄文時代の研究は、1877 年のモースによる大森貝塚の調査、すなわち近代日本考古学が始まった時から脈々と続けられてきました。すでに 150 年以上の研究史があり、膨大な先学の成果が蓄積されてきました。講座の副題は（半世紀前の先人たち）としました。主として、1970 年代の縄文時代研究の歴史を見直しつつ、日本考古学の発展の学史を振り返ります。この頃は、各時代にわたる日本考古学全体の大きな転換期になっていました。日本経済の高度成長の結果、多くの遺跡が発掘されることになり（「記録保存」）、それに必要な文化財保護の体制整備が急務だった頃です。縄文時代は狩猟採集社会という理解が定説ですが、縄文文化の農耕的な要素を追求した先人たちも取り上げてみます。

戦後の日本考古学は、戦前・戦中の皇国史観のくびきから解放され、国民の歴史を書き直すという使命を帯びていました。登呂遺跡の発掘は国民的な関心を呼び、また全国各地で地域の歴史を掘り起こす活動が始まりました。和島誠一氏は、史的唯物論（マルクス主義歴史学）の立場から、縄文文化の原始共同体について論じました。氏は 1930 年代に検挙された経歴もあり、筆名「三澤章」として執筆していました。1955 年からは横浜市南堀貝塚の発掘を主導して、台地上の竪穴住居群は共同体の広場を囲む環状集落を構成すると考察しました。市民参加の発掘調査は、研究史上よく知られています。史的唯物論における「生産経済」の前段階の「獲得経済」および共同体規制という考え方は、農耕社会の発展段階論、国家形成論と共に 1960～70 年代の日本考古学に大きな影響を持ちました。

藤森栄一氏は、八ヶ岳山麓の井戸尻遺跡群などの地域研究に基づいて、縄文中期に農耕文化を推定する「縄文農耕論」を主張しました。打製石斧を石鍬、大形石匙を除草などの農具、土器文化の著しい発達と機能分化（煮沸・貯蔵・供献）、造形・図像や土偶に見る地母神と再生の思想など、信州の中期縄文文化の様相を総合的に考察しました。また『かもしかみち』など多くの著作は、考古学を志す学徒たちに広く読まれました。他にも縄文文化の後期・晩期農耕を推定した先学もありましたが、学会では否定的な反応が続きました。一方で、民族学（文化人類学）の分野からは、「照葉樹林文化論」が提起されました。雲南省から中国南部、日本列島西部までの広大な照葉樹林帯には、かなり共通する文化複合が広がっており、モチ米、納豆、味噌、ナレズシ、茶、漆器、歌垣、サトイモ儀礼などを比較検討して、弥生時代の稲作以前には焼畑を含む農耕文化が存在したと論じました。しかし考古学分野からは批判が強く、すれ違い状況を呈しました。

その後近年、有機質の出土遺物、土器片の圧痕レプリカ法、植物遺体や花粉の分析、遺伝子の分析など、学際的な研究も進展し、クリ、マメ類（ダイズ、アズキ）、雑穀類、エゴマ、ウルシ、そのほかの縄文人の栽培民という側面も実証されつつあります。採集・狩猟・漁労・栽培という、縄文人と環境との共生が進むプロセスの「多角的生業経済」を、地域ごとに総

合的に理解する必要があるでしょう。

トピックス

以上は、全体の要旨です。以下に、スライドで解説した内容から一部を選んで、项目的に紹介します。

講座の「お題」

・今回は縄文文化についての学史的な再考です。副題は「半世紀前の先人たち」といたしました。当館の特別展「世界遺産 縄文」が間もなく開幕しますが、その予告編的な解説というよりも、特別展をいっそう深く楽しんでいただくための、研究の歴史の見直しというスタンスでお話をします。さて講座の「お題」です。縄文文化は、近年いっそう世界的な注目を集めています。人類史の流れの中で、この特異な文化は、どのように評価されるのでしょうか。日本文化の原点であるという理解は広く持たれています。ユネスコの世界文化遺産に登録された「北海道・北東北の縄文遺跡群」では、狩猟採集社会でありながら、定住を確立させ、また高度な精神文化を発展させたという、人類史上の顕著な普遍的価値（OUV: outstanding universal value）が強調されています。あらためて、およそ半世紀前にさかのぼって、研究の歴史を訪ねることで、この評価を再考してみたいと考えます。今回は、特定の海外博物館というよりも、多くの縄文文化を展示する博物館から、選択して取り上げます。縄文時代は、膨大な先人諸氏の先行研究が蓄積されている分野です。あくまでも、館長的試論として、日本列島を舞台とする長い歴史の中から、聴いていただければ幸いです。

縄文文化をとらえる視点

・縄文時代とは、いったい、どのような時代であったのでしょうか。館長講座でも、何度か触れた話題です。「日本考古学の通説に、プロセス考古学からチャレンジ!？」と話しました。何回かの「読む館長講座」（当館 HP の、過去の講座からご覧になれます）で試論を述べています。

令和3年度第8回「縄文への道」。一般に縄文時代は、世界的には「新石器時代」として位置づけられます。果たしてそうなのでしょうか。1万年の中で、各時期の継続期間、土器各型式の分布圏の広さ・狭さ、社会的な統合の度合いなどから見て、列島各地での凸凹はありますが、おおむね早期までは中石器時代、前期以降は新石器時代の段階に分けられるのではないか、という仮説でした。

令和4年度第3回「農耕をしないという選択」。縄文から弥生への変動は、高い水準の農耕文化が、東・北へ波及する過程という図式が一般的のようです。果たしてそうなのでしょうか。縄文晩期文化から弥生文化への変動は、両方の文化がしばしば並列し、両文化が交差する相互的なプロセスなのではないでしょうか。

令和4年度第4回「ヴィーナス像から土偶まで」。縄文文化の代表的な産物である土偶は、

日本独自の文脈で語られることが多いようです。果たしてそうなののでしょうか？ 後期旧石器時代から脈々として存在する、西ヨーロッパから東部シベリア・沿海州まで連続する、北部ユーラシア的な流れの一部ととらえる視点が肝要なのではないのでしょうか。

令和5年度第8回「縄文の思考・弥生の思考と現代」。縄文時代を現代社会と対比してユートピア的にとらえる「ユートピア・イメージ」が、社会的に広く存在するようです。一部研究者も「縄文ユートピア論」を唱道しています。果たしてそうなののでしょうか？ この回の講座では、縄文文化の集落に生きた先人たちの暮らしについて、文化人類学の学史にあります「人間類型」概念という面から考察し、縄文と弥生以降の文化との間の対照的な価値観念の相違を探りました。

・そのほかにも、「時代を追って」「時代を通して」「時代を超えて」という part1～part3 まで「東北グローバル考古学」各年度の大テーマのなかで、しばしば縄文文化に触れてきたところです。今回それらの続編とするなら、『時代区分』で変わる社会、変わらぬ人間性？ というお題になるのでしょうか。

時代区分と人間性

・時代が遙かにムカシでも、その時代が産んだ文化に、現代の私たちは感動します。たとえば「源氏物語絵巻」（スライド）を鑑賞し、物語世界での今と共通する人間模様、男女の機微、あふれる古典の教養、ことばの芸術（和歌）などに心うたれます。また大消費都市、江戸のドラマでは、今と共通する大都会の生活、人びとの喜怒哀楽、モウカリマッカ？の世界、商売がたきとのせめぎ合いなどに心が触れます。私たちはムカシに共感できるのです。しかし、それがどのような社会であったのか、という枠組みを理解するならば、なお感動は深まるのではないのでしょうか。また正確に資料を理解できるのではないのでしょうか。いわば「客観的な歴史の認識」に近づくでしょう。

・どのような社会か、ということを考える時、身近な時代や地域は、イメージが湧きます。「昭和レトロ」とか「戦国の世」のように、当博物館特別展で扱った時代について、それほど余計な解説は不要かもしれません。（令和4年度夏季「欲望の昭和～戦後日本と若者たち～」、秋季「みちのくのサムライたちー東北武士の系譜ー」。多くの皆様にご来場いただき有難うございました。）しかし、はるかなる年月のムカシ、遠い異国のムカシならどうでしょうか。手掛かりに「韓流歴史ドラマ」を考えましょう。はじめは、観ても良く分からないかもしれませんが、けれども繰り返していろいろ観ているうちに、だんだんと「朝鮮王朝」の時代背景と当時の社会とが理解され、ドラマにも共感が深まってくるでしょう。私は海外に出かけると、たとえ言葉が分からなくてもその土地のテレビを見るのが大好きで、異文化における社会の仕組み、価値の体系のような理解がいかに重要かということを再確認いたします。今年の連続講座では、時間・空間を超えて人間の本質を考える、また社会の枠組みを理解することを目指し、洋の東西をまたいで「時代区分」をキーワードに考えてみます。

縄文と岡本太郎氏

・かつて岡本太郎氏（1911－1996）は、「芸術は爆発だ！」という名言を残しました。1981年にテレビで発言したフレーズということですが、氏の発想の背景には縄文文化に対する深い理解がありました。1951年に縄文土器との出会いがあり、高度なアートとして評価したのです。スライドは岡本が出会った遮光器土偶で、東大人類学教室所蔵です。1956年の撮影です（川崎市岡本太郎美術館）。当時の考古学では、日本文化の源流は弥生時代以降で、縄文は未開社会とのとらえ方が主流でした。縄文土器の研究は、年代を知る物差し作りとしての土器編年を中心に進められていました。氏は1952年に美術雑誌『みづゑ』に「縄文土器論－四次元との対話－」を著して、その後に大きな影響を与えました。氏が特に注目したのは、縄文中期（約4000～5000年前）の土器で、日本人のもつアートの源流を論じました。「・・・激しく追いかぶさり重なり合って、隆起し、下降し、旋回する隆線紋。これでもかこれでもかと執拗に迫る緊張感。しかも純粹に透った神経の鋭さ。常々芸術の本質として超自然的激超を主張する私でさえ、思わず叫びたくなる凄みである。・・・後略」。

氏の解説は、縄文中期という時代に、東日本の一帯に広がっていた文化の特徴をよく表しています。縄文時代の土器でも、平安時代の絵巻物でも、人は作品そのものを鑑賞し、感動します。そのモノが、時代を超えた人間の普遍的な共感を引き起こすからです。しかし、時代が違うことは、社会の仕組みすなわち背景が違うことであり、当時の人々が日々の行動を行なって、心で感じてきた「枠組み」が違うことを意味します。

一方で岡本氏の考え方には、アートの源流を当時の社会における生業の性質に求める方向が含まれていました。アートの背景を考えるにあたり、民族学的な「狩猟民の文化」を考察しています。アートをアートで説明するのではなく、アートを生みだした文化的背景を重視する考え方です。これは、優れて文化人類学的な発想といえるでしょう。氏には1930年代にフランスに留学して、幅広く学んだ個人史がありました。パリ大学（ソルボンヌ）で、当時の民族学の権威の一人、マルセル・モースに師事して本格的に学んだ経歴がありました。

「原始共同体論」の系譜

・そもそも「原始時代」とは、いったいどのような時代なのでしょう。か。「時代区分」の由来を考えてみましょう。次回特別展「世界遺産 縄文」では、岡村道雄氏の監修のもと、さまざまな縄文人の洗練された知恵と知識を探访します。スライドは秋田県鹿角市大湯環状列石から出土した、「数の土版」といわれるものです。人間をかたどった土版の表裏両面の刺突の文様が、1から6までの整数を表現するように施されています（鹿角市教委）。環境との共生、里山、里海の文化など、かつて野蛮・未開・原始的と言われたような縄文文化のイメージを問い直すことになります。

・さて、日本史の時代区分は、原始、古代、中世、近世、近代、現代で、図書館の分類番号（NDC9版）もそうなっている定説です。こちらは中学受験のサイト例で、同じです。ところで、日本史の「原始」は、世界的には普遍的ではないことを述べました。それにあたる標

準的区分は「先史」(Prehistory)となります。この区分は館長私見ではありますが、日本の歴史学の研究史をたどると、戦後の史的唯物論歴史学に系譜をたどれるように思われます。ちなみに政治学、経済学の分野では、現在も「原始共産制社会」が、当然の前提として解説が進められることが多いです。図書館で本を開いてみてください。事典などでも同様です。理論的な用語の数々があり、低い生産力、剰余労働、搾取、階級、共同体、生産物分配、私有財産、などなど。皆さん、若いころに見たことがあるでしょうか？(失礼！)。半世紀前の先人たちの通説から由来します。しかし、相当に古い研究(考古学、人類学、民族学)が、今も生き残っての残存の印象はぬぐえません。

・1945年までの日本において、「皇国史観」は、疑問を呈することすら危険な社会的絶対価値という存在でした。戦後、一気に歴史観が逆転して、考古学は新しい歴史を作るための有力な分野として期待が集まっていました。食糧難のなか、1947(昭和22)年から行われた静岡県登呂遺跡の発掘調査は、国民的に大きな関心を集めることとなりました。水田跡、住居跡、高床倉庫跡など、弥生後期の農耕文化のムラの姿が眼前に現れて、1952年に国の特別史跡に指定されました。同じ頃に全国各地で、同様の意義づけのもとに発掘調査が盛んに行なわれました。秋田県大湯環状列石、福島県白河市天王山遺跡(東北地方弥生後期の標準遺跡)などもそうです。この頃は現在のような文化財の保護体制は全くありませんでした。地域の中高生、地元の郷土史家、学校教師はじめ、自らの国の歴史を掘り出すという動機と使命感で協力したのでした。群馬県岩宿遺跡を発見した相沢忠洋氏のような、在野の研究者も活躍しました。日本考古学は諸外国と比較した時に、地域の学問であるという性格が強いのは、この頃に確立した伝統といえます。明治時代から、在野の学問という性格があった考古学が、広く国民的な支持を得られる基盤ができました。このような基盤に支えられて、現在まで埋蔵文化財を保護する社会的な体制が整備された歴史があります。

戦後日本のパイオニア

・戦後日本の史的唯物論考古学の、パイオニアとして和島誠一氏(わしま せいいち)の存在を欠かすことはできません。氏は、横浜市南堀貝塚(みなんぼり)を発掘し、縄文時代の集落論を展開しました。環状集落を明らかにして、原始共同体の考え方を前面に出しました。経歴に言及しなければなりません。筆名は「三澤章」であり、渡辺義通らのマルクス主義歴史学に基づく概説『日本歴史教程』に執筆しています(1936、1937)。治安維持法違反で1933年に検挙されています。1934年早稲田大学中退、1941年東京帝国大学理学部人類学科選科修了、東洋大学教授、1948年登呂遺跡の発掘に参画、1955年南堀貝塚の発掘開始、1966年岡山大学教授という略歴があります。1909年の生まれで、1971年に逝去されました。主要な論考は『日本考古学の発達と科学的精神』としてまとめられています(1973刊行)。

・南堀貝塚の発掘では、市民参加の方針が一貫していて、『南堀貝塚発掘ニュース』というガリ版刷りのミニコミ誌を出しました。ガリ版とは謄写版のことで、ロウ引きの半透明の原紙に、ヤスリ上で鉄筆を使用して原稿を書いて、ローラーと油性インクでワラ半紙に刷りま

した。若い世代ではもう見たこともない方も多いようです。あらゆる学校や公民館の必需品で、いまや教育史分野の「博物館的資料」になりました。発掘ニュースの第 11 号では、貝塚の地形図、海岸平野に突き出た舌状台地、縄文海進時は海が近いこと、そして見出しは「広い視野にたって 住居址の完掘を進めよう」となっています。発掘は横浜市史、原始古代編の編さんの一環として進められました。

・台地上に住居址が広場を囲む配置で並び、縄文時代前期中頃（約 7000 年～5500 年前）、土器型式では黒浜式から諸磯 a 式を中心とします（スライド）。すでに、縄文人たちは放浪の民ではなかったという早い指摘となります。この地域は 1970 年代後半から港北ニュータウンの一部となり、現在は住宅地で、まるで違った風景です。港北ニュータウン地域の発掘調査は主に 1984 年～1989 年に行なわれました。後述する大規模発掘の時代の到来です。首都圏の考古学が、行政中心の大規模調査化していった時代で、竪穴建物群の内側の広場に、土壇墓群も発掘されました。和島氏の先駆的なモデルの正しさが裏付けられました（岡本勇氏などが調査）。

・和島氏の所論です。居住域における環状の住居址配置は、強い集団規制を表わす。氏族共同体による規制が、集落構成員に働いていた。小さな血縁集団同士が、広場を中心に結束して、より大規模な集落共同体を形成していた。集落規模が拡大して、共同体の生産力が拡大し、縄文文化のその後の発展に結びついた。氏族共同体は、やがて農耕の伝播と発展を通じて、農業共同体へと変化した。水利と共同作業を通じて、階級が発生していった。このような歴史的な発展モデルは、その後の日本考古学の理論形成に、非常に大きな影響を与えました。一例として、近藤義郎氏（岡山大学）の単位集団論などにつながっていきました。弥生時代から古墳時代にかけての社会発展の理論です。

縄文時代集落論の展開

・縄文人は放浪の民ではなかったということは、早くから明らかになっていましたが、三内丸山遺跡の発掘、特に巨大 6 本柱建物跡の発見を契機にして、1994 年以後に、「以前は、未開だったという縄文観が支配的であった」というような、不正確な言説が、マスコミ中心に広く流れ一般化してしまいました。南堀貝塚の例を紹介しましたが、ほかにも長野県尖石石器時代遺跡と与助尾根遺跡（国特別史跡）、井戸尻遺跡群の縄文中期集落と高度な土器文化、千葉県加曽利貝塚（国特別史跡）の巨大な環状貝塚（中期中心の北貝塚）と馬蹄形貝塚（後期中心の南貝塚）の実態と大規模貝類加工処理、秋田県大湯環状列石の野中堂と万座の並列構成（後期）、青森県是川遺跡の大規模な低湿地遺跡と高度な漆製品の技術といった、数々の証拠は、広く東日本全体にわたって明らかにされてきていたのです。

縄文時代の集落論といわれる分野は 1960 年代から、さまざまに繰り返され論じられてきました。集落の空間的構成から、また時期による集落の変化から社会的な関係を推定して、縄文文化の実像に迫るという大きな役割を与えられました。先駆的な業績として、先述の長野県尖石遺跡の研究がありました。「尖石石器時代遺跡」として、尖石および隣接の与助尾根

遺跡は 1952 年に国の特別史跡に指定されました。宮坂英弼（ふさかず）氏は、1929 年の皇族による調査を手伝った縁から考古学に志して、翌 1930 年から独力で発掘を開始しました。氏の調査は 1940 年から本格化し、戦争を挟みましたが、1952 年まで続けられました。当初は炉址を中心に調査しましたが、次第に縄文集落の解明を目的として、竪穴住居（33 棟）の発掘へと発展しました。炉址は 53 基を数えました。与助尾根遺跡でも 1946 年から調査を行いました。広場を囲む U 字形の環状集落が、日本で初めて明らかになったのです。

現在、遺跡には茅野市立の尖石縄文考古館があり、全国から見学者が絶えません。与助尾根遺跡は、竪穴住居を復元した史跡公園として市民に親しまれています。蛇体把手付深鉢形土器、有孔罎付土器など縄文中期の優品は、長野県宝に指定されています。考古館には、国宝土偶 2 点も展示されています。茅野市棚畑遺跡から出土した「縄文のビーナス」と、同市中ッ原遺跡から出土した「仮面の女神」です。考古館では、土偶制作の講座など行事も盛んです。

- ・縄文土器の編年研究は、1930 年代から山内清男氏が層位学的発掘という方法を確立し、縄文時代研究の中心課題となっていました。集落が論じられた 1970 年代以降は、社会的な側面の追求も拡大してきました。土器研究も型式の分布圏（同じ型式の土器が、どのように広がっているか、微妙な地域的な相異の抽出）などが研究されるようになりました。ヒスイ、アスファルトなど貴重な物資の交換、海岸部の製塩土器遺跡なども追求されました。

- ・日本経済の高度成長期に大規模な発掘調査が拡大した背景がありました。館長の記憶に残るのは、群馬県渋川市の三原田遺跡です。スライドは発掘調査報告書掲載写真ですが、榛名山を望む利根川河岸段丘の台地上に縄文中期～後期の大集落が発掘されました。加曾利 E 式期を中心に環状集落が形成され、見つかった竪穴住居は計 341 軒、土坑（墓墳、貯蔵穴）は約 1400 基に及びました。県営住宅団地の建設に関わる 1972 年からの調査ですが、遺跡地は榛名山の軽石と火山灰に厚く覆われていて、事前に大集落の存在を予測し難い状況があったとのことでした。発掘調査報告書の住居編が刊行されたのが 1980 年でした。個人的記憶で恐縮ですが、当時館長は博士課程の大学院生でした。東京の日本考古学協会総会の図書交換会で「縄文集落論に必須」とのコピーに刺激され、余裕もないのに無理して買った思い出が懐かしいことです。当時、今のようにネット上で報告書が閲覧できる時代は想像もできませんでした。また縄文集落を丸ごと掘るなどという大規模調査が、非常に珍しい頃でした。分厚くて重い書籍は、今も愛蔵しています。余談でしたが、大規模発掘調査というものが、半世紀前に、特に首都圏などで拡大した研究史の雰囲気伝われば幸いです。

「獲得経済から生産経済へ」のテーゼ

- ・獲得経済から生産経済への発展という見方は、1960 年代～1970 年代の、時代区分の基本的な考え方でした。すなわち弥生文化の生産経済開始が、大きな画期とされました。稲作農耕社会は、発展段階の高い進んだ文化という考え方で、原始共同体から農業共同体へ、社会発展の法則に則って、時代が変わるという考えです。もともとはマルクス主義の理論でした

が、イギリスのゴードン・チャイルドの学説に取り入れられて、日本考古学に大きな影響がありました。

- ・原始共同体論の縄文時代観には、狩猟採集社会の発展の限界説が内在していました。獲得経済においては、より生産を拡大すればするほど、資源の枯渇の方向に進み、人口支持力の限界に至り、社会は生産経済への転換の道をたどるとされました。生産拡大が、生産様式の変化へと向かうという、「矛盾が社会を変革する」という考え方に通じます。

- ・発展から停滞へ、そこで社会は共同体の規制を強化することで、解決しようとするが、根本的な矛盾の解決には至らないとされる「矛盾の進行が次の時代へ導く」歴史観と言えます。縄文時代の後期から晩期の社会は、このような「発展段階」停滞のステップと捉えられて、「縄文人の食い詰め論」などとも称されました。獲得経済の限界論です。

- ・1980年代には、一方で、考古学の巨大化がありました。大規模発掘調査が相次ぎました。新幹線、高速道、ニュータウンなどが代表的です。全国で、都道府県、市町村レベルで、専門職員の採用、行政内での埋蔵文化財の調査体制の整備が、ハイペースで拡大しました（1990年代まで）。一方で、アカデミックな学界内では、非常なスピードで、専門化、細分化が進行しました。そして次第に、発展段階論や、社会構成体論は、中心的な課題ではなくなっていったようです。莫大な埋蔵文化財をどのように整備していくか、発掘と報告書の内容はどうか、などの現実的な課題が大きくなりました。考古学の行政化です。

- ・しかし、史的唯物論に代わる、新たな社会発展の理論、時代区分の追求は、事実上未発達のまま、近年に至っているのではないかというのが、館長の私見です。ひとつの方向性としては、人類学的な考古学（プロセス考古学）の文化進化論（新進化主義人類学）を取り入れつつ、新たな展望を探ることではないかと考えています。これについては、令和3年度、4年度の館長講座で何度かお話しています。

（本稿は、館長講座での配布資料に大きく補足したものです。）